

被爆した神と人間 ―原爆がもたらす災禍と、平和への問い―

教学研究所 高橋昌之

はじめに

■なぜ原爆に関する研究を始めたのか？

- ・今年、「原子爆弾がもたらす災禍の諸相とその意味 ―神への問いと平和の行方―」(紀要『金光教学』63号)を発表。
- ・一昨年、「めぐり」についての研究を発表した。
 - 「めぐり」とは仏教でいう、「業」「宿業」のようなもの。(例:「ウチの家系は「めぐり」が深い」と言ったりする)
 - 主として、個人や家について語られてきた「めぐり」や無礼等について、研究した。
 - そのなかで、より広く、人間全体に関わる無礼や罪についても考える必要があると思えてきた。
 - 思い浮かんだのが戦争であり、とりわけ多くの人が殺傷され、苦しめられてきた原爆のこと。

■私にとって原爆はどう問題となるのか？

◇遠い世界でのこと

- ・とはいえ、研究に着手するまで私にとって原爆の投下とは、生まれる前に広島と長崎で起きた出来事であり、遠い世界での事という感じだった。
- 小学生のころ『はだしのゲン』を読んだり、学院生時代に広島平和集会に参加したことはあったが…

◇さまざまな事実との出会い

- ・ところが研究を進めていくと、これまで知らなかったこと、見ようとしてこなかったことが、私に迫って来た。
- ・原爆で受けた苦しみの語り難さ
 - 16歳の頃、広島で被爆した体験を60年以上、話せなかったという女性の声。
 - 原爆の恐ろしさを、子供や孫に伝えるために、ようやく重い口を開くことに。
- ・佐藤憲雄^{のりお}(広島教会長)が語る「被爆二世」としての経験。
 - 広島で被爆した両親の長男として生まれた佐藤は、「被爆二世」だったことが理由で、縁談を断られる経験をしたという。
 - 私の身内にも被爆地で生まれ育った者がいる。その当人や子供たちはどのような思いで生きてきたのか？
 - とりわけ子供たちについては、研究を始めるまで思いが及んでいなかった私。
 - 子供を持つ身として、子孫の代まで人間を苦しめる原爆が実際に使用され、今も核戦争への不安が世界を覆っている現実。それが、私自身にとっての問題だと感じられ始める。
 - 戦時中は、金光教も信心の真価を賭けて戦争に協力した歴史がある。^{*1}
 - 信心と平和との関係とは？

人間と共に苦しむ神

■調査資料に見る被災

◇広島と長崎での犠牲者

- ・昭和20年末までに亡くなった人は、広島で14万人*2、長崎で7万4千人に及ぶとされる*3。
- しかしこれらは推測の域を出ず、例えば広島の場合、実際に名前が確認された死没者は8万9025人（2019年3月末時点）*4で、推計値と大きく異なる。
- 市街地が破壊し尽くされ、正確な被害状況が把握されていない。

◇教会と布教所の被災状況

- ・本部が実施した調査の記録*5によると、広島で11ヶ所、長崎で4ヶ所の教会と布教所が被災。
- ・建物については15ヶ所のうち11ヶ所までが「全焼」し、4ヶ所が「全壊」または「半壊」したとされる。
- ・また、家族や信徒に死傷者が出たことも報告されているが、放射能被害は報告されていない。
- 背景に、GHQによる情報統制、放射能被害に関する知識の乏しさ・評価の難しさ等が窺われる。
- 被害実態が表面化し難い中、被爆者は独特の困難を抱えた可能性が考えられる。



■被爆直後の教会と原爆の描かれ方

◇広島教会への注目

- ・戦後、最も早い段階（昭和22年）で教内紙誌に紹介された広島教会。
- ・佐藤博敏が本部の「吉備寮」*6で行った講話の内容。

[...]先日も広島教会に御用をいただいている私の甥（*佐藤盛雄）の信境をきき頭がさがったのです。原子爆弾で丸割まで信者が死亡し自分ら夫婦に今年四つになった子供も爆傷をうけたが不思議に生かされているのですが、昨秋バツクの教会が建ちましたが、火鉢もなく、朝四時の御祈念を仕えさせていただくのに寒さの為耳たぶは三度もむけたそうです。

或る時信者の方が先生は修行と思うて御辛抱出来てをりますが、何も、知られない嬢ちゃんが同じように辛抱して下さる、われわれは不足はいえせん——と話したそうで、これをきいた甥は、ああ自分は子供は手まといになって困ると思うていたが、この子供のほうが道の布教をしてくれているのだと気づかされ、子供を拜むようになったということです。

元旦祭の時配給の御酒をお供えしてそれを信者と共にとそ（*屠蘇）として頂くのに、土の中に埋めてあったお盃を出して見ると、二十数個のうちで、たった一つだけ完全無欠のがあった、一つだけ生きていた、これこそ神様がお残り下されたものであると涙ながらにおし頂いたそうで、信者にその話をして、お互生きのこされていることのおほしめしをしみじみ感じたというのであります。[...]

（「信心生活の縦と横—吉備寮教師座談会—」『ゆうざき通信』昭和22年3月15日）

- 焼け跡での粗末な環境において神の働きを見いだす、佐藤盛雄教会長の家族と信徒の様子に関心が寄せられる。
- 戦後の復興を目指す、「吉備寮」の聴衆や全国の読者へ向けたメッセージが読み取られる。
- その一方、被爆者の生きる意欲を強調するほど、原爆に固有の被害が隠れかねない問題がある。

◇「人間と共に苦しむ神」

- ・そうして後年、佐藤盛雄が回想したところによれば、広島での教会復興を決意するまで、非常に逡巡させられたという。
- [...]実際に行くという大変困難なことだところだと思っておりました。まあ、幸い、強い祖母の祈りによって、引き立て

られ、導かれて、あの原爆のときに、私ども人間と神様共に、災害に、お遇いになされて、我々の苦しみの中に、神様も共に飛び込んでくださって、落ち込んでくださって、そして、現在、共に苦しんでくださり、立ち上がるうとしてくださってある。常に、お守りくださってあることを実感させていただきまして、神様がこうまで我々と共に苦勞してください。あの悲惨なかに帰るにしても、私は何もなくてもいいじゃないか。[・・・]

(「神と共に」原爆の思い出*7)

- ・佐藤盛雄が被爆後の広島で感じ取ったという、「人間と共に苦しむ神」
 - 原爆は、人々とともに神の土地を焼き、放射線によって生物が住めない場所に変えようとした。
 - その原爆を投下したのは人間。人間は神に向けて、自らの力(暴力)を極大化したことになる。
 - 佐藤は、幼少期から教えられてきた神と人間の関係や、神と土地の関係などを説くことの意味を、自問させられたのではなかったか。(「人は皆、神の氏子」「天地金乃神のご神体は天地そのもの」等)
 - 佐藤が、神を求めながら直面したであろう困難さや苦しみが、「人間と共に苦しむ神」を、陰影の様に浮かばせたのかも知れない。
- ・「人間と共に苦しむ神」は佐藤自身が感じ取った神の姿。見方によると、原爆から人々や土地を守れなかった、無力で頼りない存在にも映る。
 - しかし興味深いのは、この神が佐藤に教会の「バラック」を建てさせたり、信者の生活を整える力を与えていたこと。
 - 佐藤における慰霊のありかたや、子孫等の証言も交えながら、後ほど改めて考えたい。

被爆経験の語られ難さ

■慰霊や平和集會に浮かぶ慰霊への問い

◇占領下における原爆表象

- ・占領軍批判につながる言論活動への制限。原爆投下を非難する言論も厳しく規制された。
- ・第一回平和祭(昭和22年、広島平和祭協會主催)もGHQの監視下で開催。
 - 広島市長の挨拶は恒久平和への決意を述べつつ、核の抑止力を肯定する内容。
- ・一般的な原爆イメージとは、巨大な原爆きのこ雲、破壊された建物など、原爆の威力やアメリカの威信を示すものとして流通。
 - 原爆きのこ雲の下で、人間がどのような体験をしたのかという想像を阻む。



◇金光教における慰霊祭の始まり

- ・昭和20年11月23日、「原爆死没者慰霊祭・戦災復興祈願教祖大祭」が、己斐教会仮広前(己斐西本町・中野氏宅)にて行われる。
 - 戦災八教会(広島、広島東、鯉城、段原、竹屋、広陵、横川、己斐)による合同主催。
 - 何れの教会も建物を失ったため、己斐教会関係者が提供した場所に集い、皆で死者の御霊を慰めたと考えられる。

◇日本社会の変動と平和への眼差し

- ・戦後、非武装化が行われた日本だったが、東西冷戦の進展に伴って反共的軍事同盟への協力が求められ、アメリカによる再軍備が画策され始める。
 - 朝鮮戦争勃発(昭和25年)を契機として、マッカーサーは日本政府に警察予備隊の新設、海上保安庁

の拡充を指示。

・戦前の軍事警察国家への回帰現象(「逆コース」)は、「もう戦争はこりごりだ」という国民を暗澹たる気持ちにさせた。教内にもこの動向を危惧する声が見られる。

・その一方、ソ連による原爆実験をはじめ、地域の軍事的緊張が高まる中、積極的に再軍備を進める意見も見られた。

→以下は、福田美亮(サンフランシスコ教会長)の投書。

平和条約の成立と共に日本の再軍備の問題がやかましく論ぜられて居り、日本国民はどうしてよいのか判らぬ、と云う事であるが、宗教上の論議は別として、人間社会の現実の実際論として、日本は結局再軍備をせなければならなくなると思う。それはもうハッキリした道順である。

吉田総理が、従来軍備はせないと云っていたのは、外交上のかけひきと、国内与論の指導上のかけひきであって、いやでも応でも再軍備をせなければならなくなるのは当然である。[・・・]大戦前は戦争反対をしても時の軍部の圧迫で学者や、平和論者の主張はふみにじられて、一路太平洋戦争へ突入して行ったのである。

これと同じ事で、戦争放棄、武装撤廃の憲法は立派な理想であっても、米軍が日本の要衝を押えて空軍の原爆がらんでいる以上、日本は米軍の求める通りに、再軍備して米国側に立つ事になるの理の当然である。

いろいろの議論はあっても結局はそこへ行く事がハッキリしているのである。

(「米国より見たる 平和条約の成立と再軍備の問題(一)」『金光教青年』昭和27年7月号)



・福田は昭和 5 年に渡米し、翌年にサンフランシスコ教会開教。同教会長、北米布教管理所長として活動しつつ、現地の日系人社会でも指導的役割を果たす。

→戦時中は「A級指導者」(日系人における最危険分子)として、6年間の収容所生活をおくった。

・福田の意見は、東西両陣営のいずれかに属する事と、近い将来に戦争が起こる事を前提とした上で、日本が生き残る道を探るといふ、彼なりの「平和」観を反映している。

・福田の意見に対して読者からは、異論が噴出*8。

→しかし福田本人は意に介さず。「宗教団体がどんなに叫んでみても、それに応じて、ハイさようですかと、軍備をやめて呉れる国は只の一国もあるまい」*9

→核による戦争抑止論に通じるもので、被爆者の心情を逆なでするような言葉。

・その後、福田が指摘する通り各国は軍拡競争に走り、日本の再軍備も進められた。

→彼の主張は、国際的な観点からする「常識的見解」だった、との見方も可能だろう。

・しかし、そうだとすれば考えるべきは、こうした厳しい「世界」の現実に向けられる信心する者の眼差しとは如何に有り得るか、という問題ではないか。

・福田は「宗教上の議論は別として」としていたが、それは一宗教者として政治的主張を繰り広げる行為が既に破綻していたことを意味する。

→軍拡に走る政治の動きに恐怖を覚え、声を上げる人々の願いを、信心する者自身が内側から掘り崩しかねなかった。

→厳しさを増す国内外の状況に、私たちは宗教者としてどう向き合うべきなのか？

◇被爆体験の語られ難さ

- ・16歳の時に広島で被爆した福田喜代子(横川教会)は、戦後60年以上、人前で被爆体験を語れなかったという。

→彼女は戦後30年の節目に開かれた座談会で、苦しい胸の内を明かしていた。

[...]もう七月、八月が来ると胸がつまるんですよ。原爆の話を、ラジオやテレビで放送する時点からねえ。娘時代はね、原爆の話、原爆娘*10ということが取り上げられることが、ものすごくいやだったんですけど、今はそうじゃなくて、毎年それが走馬灯のように繰り返されます。そして、その時を思い返して祈り、今を考えて御礼を申し、それを生かさねばと、切実に思うんです。それがまた、私にとっては、ものすごく切ないというか……。我が子は、今はそういうことがないんだから有難いということの方が本当は強くて……。あの人はどうなったんだろうか、ということが頭から消えないんですよね。だから、父と一緒に逃げたことも思い出しますが、あの小さい子供が爆風で飛ばされて、片足がひっかかり、宙ぶらりんで助けを求めていた姿をどうしても思い出して胸に迫ってくるんです。 [...]

(「原爆投下三十周年 金光教平和祈願広島集会」『金光教徒』昭和50年8月11日)

- ・若くして被爆し、メディアによって「原爆娘」(原爆乙女)と名づけられた女性達がいた。

→ケロイド治療のために芸能人が募金活動を行うなど、彼女らは全国的に注目される存在だった。

- ・「原爆娘」たちは、治療のため滞在した米国で「心の美しさ」が大変な称賛を受け、「民間外交大使」と呼ばれる様子などが、度々報道された。

→彼女らの報道が、戦犯や米国との「赦し」「和解」を演出したとの指摘*11。嫉妬の対象にもなった。

- ・福田喜代子は若い頃、「原爆娘」の報道に触れる事が「ものすごくいやだった」と振り返る。

→同年代の彼女にとって、「原爆娘」は自らに重なり、心身の傷を繰り返し抉られるような経験をさせられたのではなかろうか。



- ・避難途中に出会った少年を助けられなかった無念さ。

→被爆直後の死から逃れ、いま生きている自分を語ろうとすると、亡き人々の姿が影の様に浮かぶ。

→自身の生が、その子供の死を背景にして成り立つ感覚を抱かされていたのではなかろうか。

- ・人前で経験を語るまでの時間とは。

→「原爆娘」がメディアで消費され、辛い経験さえ利用される戦後社会。そんな社会にあって慰霊の意味を求め続けた日々の生活の上に、辛うじて成り立つのが語る営みではなかったか。

→この語る営みは、子孫の顔を思い浮かべながら、初めて可能となっている。

→世代を超えて捉え返される、信仰への問いを投げ掛けている。

世代を超えて捉え返される神と救いの意味

■神への向き合いと慰霊

◇広島教会で続けられてきた慰霊に注目して

- ・佐藤憲雄(広島教会長、佐藤盛雄の長男)が、先の座談会で述べた内容。

[...]私の場合、両親が被爆者であり、私はその二世であるということがありますので、この平和集會も、いわゆる形式的なものにしていきたくない。真に慰霊ということがどうあったらよいかということ、絶えず問題にしてい

たいと思っています。

現代社会に金光大神を現す、とかいろいろ言われますけれども私どもにはそれは二の次のこと、各地で平和集會が行われるでしょうが、私はねえ、広島の場合は、まず原爆ということをお忘れちゃあならんということです。それを基本にして、原爆で亡くなられた方々に、犠牲になった方々を基盤としての、平和ということを考えていきたいと思えますねえ。[…]

(前掲「原爆投下三十周年 金光教平和祈願広島集會」)

- ・「被爆二世」としての考えを求められ、意見を述べる佐藤憲雄。
 - 「被爆二世」であることがネックで縁談が進まない経験をしていた。
 - 「原爆症」で若くして母を亡くし、アメリカへの「恨みつらみ」を抱えながら過ごした日々。
- ・その佐藤憲雄に対して、父盛雄が掛けていたという言葉。
 - 「それではお前は一向に救われない、そういう心ではいつまでも助からない」
 - 「日本はアメリカに原爆を落とされたが、日本軍もアメリカにひどいことをした」
 - これらの言動には父・盛雄の苦悩も表れていたのではないか。
- ・佐藤盛雄に促された慰霊
 - 神の氏子(人間)が原爆を投下した事で、神に多大な苦しみを与えた事を詫びていたのでは。
 - 戦後、佐藤盛雄は広島教会で、全世界の戦没者を慰霊していたとされ、今も続けられている。
 - そうしてみると慰霊とは、余りにも助かり難い「人間」という存在に向けられた、神の悲しみや苦しみを感ずる営みであり、そうであれば尚のこと、何とかして人間を助けたいとする神の願いに触れる営みではなからうか。(「人間と共に苦しむ神」)
- ・広島教会では今も、「神様は人間と共に苦しんで居られる」との言葉に立ち返られるという。
 - 佐藤に促された慰霊という営為が、こうした神と人間の関係を新たに見いだすべく、人々に働きかけていると思われる。

■原爆の経験が人間に投げ掛ける意味

◇久保田盛磨呂(鯉城教会長)とS君の関わりに注目して

- ・久保田は、徴用先で知り合ったS君(日系二世の米国人)の死を手記で振り返っていた。
 - ・近年、久保田の孫(白神亜礼)が発見した未完成手記には、家族も知らない事実が書かれていた。
- S君の最期をめぐって。白神はその手記を読んだ感想を以下の様に記している。



[…]それでも声を掛け合いながらなんとか一晩を過ごし、夜が明けて見たら、少年(*S君)はもう動けなくなっていました。彼の枕元には、戦時中の非常食であった乾パンが数個置かれていました。祖父(*久保田盛磨呂)はこの乾パンを一つひとつ拾い上げ、心の中で「これはもう君にはいらぬものだ、僕がもらって行くよ。僕はまだ、これから生きていかねばならないのだ。どうかゆるしてくれたまえ」とつぶやいて持ち去ったのだそうです。その後、少年がどうなったのかはわかりません。祖父はそのときのことを「闘の中で、誰かがこのさもない行為をじっと見ているような気がした」と記しています。戦時中、生きるか死ぬかの極限状態の中で、祖父のような行動をとってしまった人もいたでしょう。しかし、祖父は宗教家という、自分が助かることよりも、他人が助かることを祈る立場であったにもかかわらず、少年の少ない食べ物を持ち去ったことを後悔していたに違いありません。[…]

(白神垂礼「だから、バトンを受け取った一被爆した祖父の小さな一歩」*12)

- ・未完成手記には、S君の最期に立ち会った祖父(久保田)が、もはやS君に不要となった乾パンを持ち去ったという事実が記してあった。→文章の行間には、祖父の後悔が滲んでいた。
- ・久保田がこの事実を書き遺したことに浮かぶ意味とは
 - 戦後、彼は近所の子供に戦争体験を話したり、夏になると動員学徒の慰霊祭を仕えていた。
 - 国家(大人達)の都合で犠牲となった、S君のような若者への「償い」の念が浮かぶ。
 - また久保田にとって、日系アメリカ人であるS君の死は、日米という国家の枠を超えて人間を殺傷する戦争や原爆、それを生み出す人間存在について、深く考えさせずにはおこななかったと思われる。

◇原爆がもたらす人々の経験から

- ・佐藤盛雄や久保田盛磨呂らの様子からは、彼等が死者の記憶と共に、神を苦しめる人間の所業に向き合わされ続けたと考えられる。
- ・彼等を含めた被爆者の経験は、神に対する人間の無礼を白日の下にさらし、その在り方を厳しく問うてくる。
 - 彼等の経験は、自身の無礼を詫びて神仏も助かることになったという、教祖四二歳の大患を彷彿とさせるものであり、神と人間の救いに向けた在り方を考えさせる。
- ・被爆した夜、久保田は燃え盛る広島町を見ながら、「世界は終わった」との声を聞いたという。その時、驚いて周りを見ると、空にはいつも通りの星が輝き、目の前の川も流れ続けていた。
 - あらゆる感傷を受け付けない「世界」が現に存在し、その上に自身の日常が有り得てきた現実に出会われる。彼等を苦しめた軍国主義は、人間が勝手に作り上げた「世界」の一つに他ならない。
- ・平和とは、自身の経験を話せないとしてきた人々の痛みを促され、生者と死者とが共働して求め続ける日々の中に展望される。
 - 戦争へと突き進む世界の現実を捉え返すべき、信仰の意味を試している。
- ・本研究で見えてきた人々の経験は、私たちに何を突きつけているか？
 - 目を背けたくなる歴史と向き合う努力を続けられない限り、「大東亜共栄圏」の正当性を唱えて人々を戦場に送り込んできた信仰の残滓が、昨今の世界情勢に見る分断への危機感を煽りながら、再び肥大して現前することを告げているに違いない。

*1 大林浩治「戦下の生活と信心」紀要『金光教学』第43号、2003年。

*2 「約14万人」という数は、1976年に広島、長崎の両市が国連事務総長に提出した要請書の中で「14万人(誤差±1万人)」と報告したことに端を発する。広島市の被爆前の人口推計と、被爆後の政府の人口調査を比較するなどして算出された(『ヒロシマの空白—被爆75年—』中国新聞社、2021年)。

*3 長崎市ホームページ(http://city.nagasaki.ajisai-call.jp/faq/show/3705?site_domain=default、令和5年6月30日現在)。

*4 前掲『ヒロシマの空白』。

*5 教学部長名により昭和20年11月20日付けで、戦災教会主管者および布教所代表者に実施した調査報

告(「戦災教会実情調査」)及び、教学部教務課が同21年2～3月頃に作成を開始したと考えられている「戦災疎開引揚教会台帳」。

*6 本部では、戦災にあつたり海外から引揚げてきた教師や家族の再起を後押しする施策の一つとして、昭和20年12月、彼らの宿舎に吉備乃家旅館を提供した。そこは「吉備寮」と名付けられ、同21年末頃には21家族、77名が入寮していたという(児山真生「引揚教師の「布教」への問い、その意味」紀要『金光教学』第43号、2003年、註25)。

*7 『道の幸一佐藤教子幸玉高照姫之霊神40年祭 佐藤憲雄眞道共栄大人之霊神10年祭 偲草一』金光教広島教会、平成19年。昭和30年8月7日に中国放送でラジオ放送された、佐藤盛雄、教子夫妻のインタビュー記録。

*8 「福田は米国の民主主義を称賛し、日本の現状を知らないまま再軍備を唱えている。彼の言う通りにすれば、日本はその植民地となり戦争に巻き込まれるだろう」(竹中正和「福田氏の論に対する反論」(「青年の声」『金光教青年』昭和27年8月号)、「日本の現実を見れば再軍備するしかないと言うが、その「現実」に働きかけるのが金光教ではないか」(池川聰雄「新しい革袋は與られている」『金光教青年』昭和27年10月号)、「米国側から与えられた平和憲法とはいえ、それを安易に改正して再軍備する事は許されない」(宇野謙一(東大生)「平和問題に就いて一特に福田師の論に対して一」『金光教青年』昭和27年11月号)等。

*9 福田美亮「軍備問題と米人氣質我観(二)」『金光教青年』昭和28年1月号。

*10 彼女がいう「原爆娘」は「原爆乙女」とも呼ばれる。両者の使い分けはないものの「原爆乙女」の用例が多いとされる。被爆した若い女性を「原爆乙女」と呼ぶ例もあるが、ここでは火傷によるケロイドを治療するために東京や大阪、あるいは米国で整形手術を受けた女性達を指している。

*11 中野和典「「原爆乙女」の物語」『原爆文学研究』第1号、2002年8月。

*12 シンポジウム「平和、非核、人類文明の未来—宗教者・研究者による対話」(2019年5月に上智大学で開催)にて白神が発表した内容。『核廃絶—諸宗教と文明の対話—』(〈編〉上智学院カトリック・イエズス会センター・島蘭進、岩波書店、2020年)所収。なお白神と娘が原爆慰霊碑ガイドボランティアをしていた時、二人が久保田の被爆体験に向き合う姿と、この手記に基づいた内容が、NHKのドキュメンタリー番組「っぽん紀行」で全国放送された。その後、同番組は翻訳され世界130カ国で放送された。